慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本におけるフットサルの普及に関する研究
Sub Title	Futsal
Author	須田, 芳正(Suda, Yoshimasa) 大嶽, 真人(Otake, Masato) 依田, 珠江(Yoda, Tamae) 石手, 靖(Ishide, Yasushi) 田中, 博史(Tanaka, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2004
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.43, No.1 (2004. 1) ,p.7- 13
Abstract	This research is conducted to gain the popularity of Futsal, a s port widely spread in the world as well as in Japan, through its historical development in Japan. Another objective is to explain and describe the current circumstances of Futsal in Japan and come up with solutions to problems that exist in Japan and to direct the developing movement Futsal in Japan. Futsal was founded in Uruguay. It was derived from soccer which had tremendous popularity at that time. It has been said that the origins of Futsal comes from Juan Carlos Ceriani, who was a leader at the YMCA (Young Men's Christianity Association). He used the rules of basketball, handball and water polo to create the rules of this indoor soccer game. This sport quickly spread to countries in South America and the rules were formalized in Brazil. This indoor soccer game gained global popularity in the 1960s. FIFUSA was established in 1971 and the first worldchampionships were held in Brazil in 1982. FIFA quickly realized that indoor soccer could be established as an individual sport and included indoor soccer into its scope. In 1994, FIFA changed the rules of this 5 a side indoor soccer game and named this game Futsal. Futsal in Japan has been developing rapidly in the 1990s. In its earliest years Futsal was used as a training method for soccer and the rules differed between areas, but recently, Japan Futsal Federation has worked to formalize the rules and nationally organize the sport. By this movement, players will be able to enjoy the sport more casually and safely. Futsal is known for its casualness and therefore is thought to be spread throughout Japan as life long sport, community sport and family sport. However, in order to spread Futsal as a competitive sport, training of coaches, development of local leagues, national league and the strengthening of the national team is inevitable. Futsal in Japan could be described as passed the
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00430001-0007

日本におけるフットサルの普及に関する研究

須田　芳正*　　大嶽　真人*　　依田　珠江*　　石手　　靖**
田中　博史***

Yoshimasa SUDA[1)], Masato OTAKE[1)], Tamae YODA[1)], Yasushi ISHIDE[2)]
Hiroshi TANAKA[3)]

This research is conducted to gain the popularity of Futsal, a sport widely spread in the world as well as in Japan, through its historical development in Japan. Another objective is to explain and describe the current circumstances of Futsal in Japan and come up with solutions to problems that exist in Japan and to direct the developing movement Futsal in Japan.

Futsal was founded in Uruguay. It was derived from soccer which had tremendous popularity at that time. It has been said that the origins of Futsal comes from Juan Carlos Ceriani, who was a leader at the YMCA (Young Men's Christianity Association). He used the rules of basketball, handball and water polo to create the rules of this indoor soccer game. This sport quickly spread to countries in South America and the rules were formalized in Brazil.

This indoor soccer game gained global popularity in the 1960s. FIFUSA was established in 1971 and the first world championships were held in Brazil in 1982. FIFA quickly realized that indoor soccer could be established as an individual sport and included indoor soccer into its scope. In 1994, FIFA changed the rules of this 5 a side indoor soccer game and named this game Futsal.

Futsal in Japan has been developing rapidly in the 1990s. In its earliest years Futsal was used as a training method for soccer and the rules differed between areas, but recently, Japan Futsal Federation has worked to formalize the rules and nationally organize the sport. By this movement, players will be able to enjoy the sport more casually and safely. Futsal is known for its casualness and therefore is thought to be spread throughout Japan as life long sport, community sport and family sport. However, in order to spread Futsal as a competitive sport, training of coaches, development of local leagues, national league and the strengthening of the national team is inevitable. Futsal in Japan could be described as passed the

はじめに

近年，フットサルは世界に広く普及し，多くの愛好者によってプレーされている。フットサルは5人制のサッカー競技で，ローバウンドのボールを使い，クリーンでフェアーにプレーするよう競技規則が設けられているため，チャンピオンスポーツとしてだけでなく，いつでもどこでも誰でも楽しむことができるレクリエーションスポーツとして人気を集めている。

フットサルの語源は，スペイン語の futbol sala とポルトガル語の futebol de salão の fut と sal とを派生・合成させて作った言葉で，部屋の中でプレーする室内サッカーを表す。世界各地で行われていた室内での少人数制のサッカーが「フットサル」として世界的に統一された呼称となったのは1994年のことである。それまで南米やヨーロッパではそれぞれの国で「室内サッカー（日本語訳)」，「ミニサッカー」と呼ばれ，独自のルールの下に

*慶應義塾大学体育研究所助手
**慶應義塾大学体育研究所専任講師
***大東文化大学

1) Instructor, Institute of Physical Education, Keio University
2) Assistant professor, Institute of Physical Education, Keio University
3) Daito Bunka University

行われていた。「室内サッカー」は室内で行うサッカーであり，室内という制約の中でそれに合ったルールが考案されたもので，ミニサッカーはサッカーの縮小版と考えてよい。それが世界的な普及の可能性をFIFAが認め，ルールおよび呼称をフットサルに統一したところから現在の発展がみられたといえる。その経緯については次章以降に述べる。

公式な大会ではフットサルは室内で行わなければならないが，レクリエーションで行う場合では屋外で行うことが多い。日本においても最近では首都圏を中心に数多くのフットサルコートが出現し，テニスコートやデパートの屋上がフットサルコートへと変わっている。平日の夜にはサラリーマンやOLがボールを蹴り，週末にはサークルや家族で楽しむ姿をよく見かけ，コートを予約するのも大変な状態である。また，フットサルはここ数年の間に大学の授業にも取り入られるようになり，履修する学生も年々増加している。フットサルはサッカーにない手軽さを持ち合わせ，今後も相当な勢いで広がりを見せていくことがうかがえる。日本に持ち込まれてからまだ日の浅いフットサルではあるが，これからさらに普及していくことが予想される。しかしこの競技の基礎的な資料は今のところほとんどまとめられていない。日本サッカー協会もおおまかなデータをもつにとどまり，今後の普及・指導の課題を明らかにするためにも現段階で把握されている状況と実態についてまとめることが必要であろう。そこで本稿では，フットサルの起源と普及について検証し，我が国におけるフットサルの現状と課題，並びに今後の普及の方向性について考察した。

1．フットサルのルーツ

(1) ブラジルとウルグアイ

フットサルはウルグアイ生まれのブラジル育ちと言われているが，その実際のルーツはどこなのかという問いに対して，やはりブラジルかウルグアイかという二つの意見に分かれる。資料的にもっとも確実な記録が残っているのは，ウルグアイをルーツとする説である。

南米では19世紀末からサッカーがエリートのスポーツから庶民のスポーツへと急ピッチで進化していった。特にブエノスアイレス，サンパウロ，リオデジャネイロ，モンテビデオといった都市部でサッカーは普及し人気が高まっていった。それと同時に国の代表チーム同士の試合も行われるようになり，アルゼンチン，ブラジル，ウルグアイの3カ国が強いライバル意識を持つようになった。その相乗効果で3カ国は実力をつけ，1920年代にはヨーロッパの高いサッカーレベルへ追いついていった。特に輝かしい成績を収めていったのがウルグアイである。1924年(パリ)，1928年(アムステルダム)の両オリンピックで優勝をした後，1930年，自国での第1回サッカーワールドカップで優勝を飾った。当然のことながらサッカーは爆発的な人気となり，国民的スポーツとして，子供から大人までサッカーがプレーされるようになった。

このころモンテビデオのキリスト教青年会YMCA（以下YMCA）では，すでにアメリカ由来の室内スポーツとしてバスケットボールやバレーボールが行われていたが，自国ウルグアイのワールドカップの優勝を契機に，生徒たちは授業後いたるところでサッカーを盛んに行うようになった。当時，モンテビデオでは都市化が進み，急増するサッカー人口に対して，それをカバーできるだけの施設があまりにも少なかったため，生徒たちは体育館でもプレーしていたが，窓や施設を破損してしまうことが数多くあった。それを見かねたモンテビデオのYMCAの指導者で，後の南米YMCA事務局長として活躍するアルゼンチン人のファン・カルロス・セリアーニ（Juan Carlos Ceriani）がバスケットボール，ハンドボール，水球のルールを応用し，室内で行うサッカーのためのルールを初めてつくり，1930年9月8日に披露した。

その後，YMCAのラテンアメリカ連盟スポーツ技術委員長ジェームス・サマーズの依頼を受けたモンテビデオのYMCAの指導者9名がセリアーニの最初の室内サッカー規則をもとに，初めて正規のルールを創案した。

こうして完成された新スポーツは，キリスト教布教の補助手段として，まずブラジルへ，そしてアルゼンチン，パラグアイ，チリ，ペルー，やがて南米全体へ急速に広がっていった。特にブラジルでは，屋外のバスケットボールコートなどでミニサッカーとして盛んに行われていたため，すぐにこの室内サッカーにも関心が寄せられ，大人気となった。この競技のルーツがブラジルではないかという説があるのは，その後の成長と発展に責任をもち，独立した競技としてまとめあげていったのがブラジルだったからである。

(2) ブラジルにおけるフッチ・ボール・デ・サロンの発展

ポルトガル語を公用語とするブラジルでは，futebol de salão（フッチ・ボール・デ・サロン）と呼ばれる室内サッカーが発展していった。

1936年，サンパウロ YMCA の機関紙にウルグアイ発の室内サッカーのルールと運用についての最初の論文がロジャーグレイによって発表された。この時期はブラジルサッカーが大きく発展した時代でもあった。1940年代半ばからブラジルではサッカーの指導者になるためには体育大学で専門課程の取得，フィジカルトレーナーに関しても，２年間のスポーツ医学の勉強が義務付けられていた。1950年代からのブラジルサッカーの快進撃の裏には，こういった惜しみない努力があったのである。

これだけのサッカー熱の中，室内サッカーも急激に成長していった。1949年，サンパウロ YMCA の室内サッカー委員会が初めて「室内サッカールール」を刊行し，まず室内サッカー選手権の実行組織として，「室内サッカー普及連盟」を設立した。1952年にはサンパウロで，1954年にリオデジャネイロで「首都フッチ・ボール・デ・サロン連盟」を組織し，さらに1955年にはサンパウロ州の連盟，同選手権大会も立ち上げ組織作りの草分け的役割を果たした。やがて南米各国もお互い手を結び始め，1960年の「南米室内サッカー連盟」(CSFS)の誕生に続き，1965年には南米選手権大会が実現された。また，1949年からルール改正に取り組んでいたサンパウロ YMCA 体育指導者のハビブ・マヒューズとルイス・ゴンザガ・フェルナンデスの両氏が共同で近代のフッチ・ボール・デ・サロンのベースとなる本格的な競技規則を1956年に作った。1958年，ブラジルスポーツ連盟（以下 CBD）の広報に，この競技規則が公式競技規則として掲載され，1960年代から活発になった国際試合の世界共通の規則として用いられるようになった。

このスポーツがウルグアイ生まれブラジル育ちといわれる理由は，ブラジルに比べウルグアイの国内組織の誕生が1965年と組織面で立ち遅れたことと，この競技に適応するボールの開発が主にブラジルで進められたということからである。

2．世界への普及

(1) FIFUSA（Federaicion International de Futebol de salão）の誕生

1960年代に入り，室内サッカーは世界規模にまで成長していったため，1971年７月25日，ついに「国際室内サッカー連盟」（以下 FIFUSA）が創立された。国際サッカー連盟（以下 FIFA）の前会長ジョアン・アベランジェが初代名誉会長を務め，事務局長として1956年競技規則を完成させたフェルナンデスが室内サッカー発展に尽力した。

1982年，FIFUSA は第１回世界選手権大会をブラジルのサンパウロで開催した。この大会の参加国は10カ国のみであったが，南米のみならずイタリア，オランダ，チェコスロバキアといったヨーロッパ勢に加え，アジアから唯一日本も参加している。それ以降1985年（スペイン大会），1988年（オーストラリア大会），1991年（イタリア大会），1994年（アルゼンチン大会），1997年（メキシコ大会），2000年（ボリビア大会）と計７回の世界選手権大会が行われているが，1989年に FIFA は独自の世界選手権を行い，各国のサッカー協会の傘下でフットサルだけを唯一の室内サッカー競技であるとし，それ以外を排除することを公言した（フットサルという呼称は1985年の世界選手権大会でも見ることができるが，この名称は一部のスペイン語圏だけで用いられていた）。FIFUSA の大会に参加していた各国協会もそれに従う方向となり，FIFUSA の存在が薄れていった。しかしながら FIFUSA は独自の路線で世界選手権のほかに1986年に南米クラブユース選手権，世界クラブ選手権，1988年にはヨーロッパ選手権を開催し活発な国際交流を実現した。

(2) 世界の室内サッカー

1980年代初期のころまで世界の室内サッカーにはさまざまなものがあった。大きく分けると，南米を中心に弾まないボールを使って行われた「フッチボールデサロン」と，ヨーロッパを中心に普通のサッカーボールなど弾むボールを使って行われた「インドアサッカー」の2つに分けられる。ヨーロッパでも南米に勝るとも劣らぬサッカー熱が独特の室内サッカーを生み出してきた。ドイツでは11人制サッカーのプロリーグであるブンデスリーガのプレーヤーたちが冬季のトレーニングと興行を兼ねたハーレンフッスバール(ドイツ語で室内サッカー)をフェスティバル形式で行い，多くのファンを集めた。オランダやベルギーでは早くから完成度の高いルールを取り入れて行われたザール（オランダ語で室内サッカー）があり，イタリアにおいてはカルチョ・チンクエット（イタリア語で５人制サッカー）と呼ばれ，都心部を中心に発展した。一方，アメリカでは壁で囲まれたピッチを利用し，弾むボールを使用し，激しさとスピード感あふれるアイスホッケー式サッカーがプレーされており，今でも根強い人気を得ている。オーストラリアでも独特なインドアサッカーが行われていた。大型のテニスボールのよ

うな球を用いた競技であった。

このように世界各地で独自の文化を持った室内サッカーやミニサッカーが行われていたが，FIFUSA だけ国際交流に成功した。

(3) FIFA の介入

FIFUSA の世界選手権大会が回を重ねるにつれ，室内サッカーが十分に競技として成り立つことが証明されていった。これにより，サッカーを統括する唯一無二の団体である FIFA は，世界戦略のひとつとして，室内サッカーをその傘下に取り込み，発展させようと目論むようになった。そこで，FIFA は1984年から５人制サッカーに関するさまざまな調査や実験を開始し，1985年に５人制小委員会を結成した。壁付きか壁無しか，スローインかキックインか，ペナルティエリア内のシュートを認めるか，ボールの大きさや弾み具合をどうするか，審判の人数，接触プレーの許容範囲，興行性の問題等，多岐にわたる各国の現状を整理しながら，室内サッカー，ミニサッカーの長期展望での世界統一を目指した。1986年６月，小委員会は「５人制室内サッカー競技規則」の試案を出し，ルール適用の国際大会をハンガリー，ブラジル，スペインで開催し，1988年６月に「Five-a-Side Football」という名称で競技規則が正式に制定された。このルールはどちらかというとハンドボールのコートを用いて，いわゆる“サッカー”を５人で行うというもので，それまでブラジルやスペインで行われていた室内サッカーとは大きく異なったものになった。

1989年１月，FIFA はこの競技規則のお披露目に第１回世界選手権をオランダで開催した。まだ予選を行える状態でなかったため，招待大会として世界16カ国が参加した。日本からも日本サッカーリーグ（以下 JSL）で戦っていた本田技研が国内予選を勝ち抜き日本代表として参加したが，残念ながら一勝もできずに予選敗退となった。結果は，ブラジルがオランダを破り初代チャンピオンとなった。

大会終了後，FIFA 本部にて FIFA と FIFUSA のトップ会談が行われ，フットサルの進むべき方向性について合意に達した。結局，FIFUSA は FIFA への事実上の吸収というかたちに収まり，FIFUSA のほとんどの首脳陣がそのまま FIFA に統合した。現在 FIFUSA は，一部の強硬派の国々で細々と継続させている。

FIFA が制定した5人制サッカーの世界統一競技規則に基づき，いくつかの大会が開催されたが，その中でも第１回世界選手権大会は，FIFA にとって“もっとも重要なもの”であった。５人制サッカーはサッカーと比べ大きな施設を設置する必要がなく，比較的少ない費用でプレーすることができる。世界選手権大会で競技規則が十分機能することが確認されたこともあり，その後，各大陸で広がりを見せることになる。1990年，FIFA はローマでの会議において，室内（５人制）サッカー委員会を FIFA の正式な委員会とした。サッカーファミリーの１つの競技である５人制サッカーのさらなる推進を行うことにしたのである。

1992年，FIFA は第2回世界選手権大会を香港で開催した。この大会から各大陸の予選を勝ち抜いた国が世界選手権に出場することとなり，日本からは JSL から日立製作所が東アジア予選に参加したが，中国に敗れ世界選手権大会の出場は果たせなかった。決勝は，アメリカを破ったブラジルが再び世界チャンピオンの座についた。

(4) フットサルの誕生

この大会終了後，FIFA は過去２回の反省を踏まえて大幅なルール改正に取り組み，1994年1月に競技規則を改正した。それとともに５人制の室内サッカーを「フットサル（Futsal）」に改称した。香港大会以降，FIFA はフットサルの世界選手権を４年ごとと定め，また，この競技規則を試す1994年国際フットサル大会をイタリアのミラノで開催した。

1996年11月，スペインで第３回世界選手権大会が開催され，大いに盛り上がった。決勝は，ブラジルが開催国スペインを破り，3連覇を果たした。日本代表は東アジア予選に挑んだが，またしても予選を突破することはできなかった。

第４回 FIFA フットサル世界選手権大会は2000年11月にグアテマラで開催されることになった。FIFA はこの世界選手権のために競技規則の見直しを図り，1999年10月に新しい競技規則の草案を発表した。これはフットサルの特徴であるスピーディーさやフェアプレーをより引き出そうというものであった。前大会と同じカードのブラジルとスペインの決勝となり，スペインがブラジルを破り，ブラジルの４連覇を阻んだ。日本代表はまたもやアジア枠の３カ国にはいることができず，出場することができなかった。

FIFA は，このグアテマラ大会以降，サッカーファミリーのこれ以上の大幅な増加はフットサルの発展以外にないとして，フットサルの普及，発展，強化に取り組む

意向を表明した。

3．アジアのフットサル

(1) アジアでの普及

世界の流れをつかみ，アジア各国におけるフットサルの普及，発展に取り組もうとようやく重い腰を上げたアジアサッカー連盟（以下AFC）は，1999年3月，第1回アジアフットサル選手権大会をマレーシアのクアラルンプールで開催した。参加国は9カ国で，日本はJリーグで活躍したラモス瑠偉選手をキャプテンに据え，日本らしい高い技術を披露したが，アジア最高峰のイランなどに破れ，4位に終わった。この大会には，ウズベキスタン，カザフスタンなどの旧ソ連の国々も参加し，アジアにおけるフットサルの新しい広がりを見せることとなった。

以後AFCは，毎年大会を開くことにし，年々参加国も増えている。第2回大会はタイのバンコクで10カ国，第3回大会はイランのテヘランで14カ国，第4回大会はインドネシアのジャカルタにおいて14カ国で行われ，イランは4回連続で優勝している。そのイランであるが，アジアでもっともフットサルの環境が整備されており，街中いたるところでフットサルを楽しむことができる。また，2002年から全国規模のプロリーグがスタートし国を挙げてフットサルの強化に取り組んでいる。

フットサルはアジア人に非常に向いているスポーツである。サッカーと違い空中戦や激しいコンタクトプレーが少ないため，体格のハンディを感じさせないという点からアジアの国々の可能性を感じる。

4．日本のフットサル事情

(1)「サロンフットボール協会」の設立

日本においても以前から各地域において，狭いスペースでのトレーニングや，冬の期間，屋外の広いフィールドでサッカーができない降雪地域でのトレーニングとして，ミニサッカーは行われてきた。また，熊本，秋田，八王子などでは競技スポーツとして発展させ，独自の競技規則の下，1970年代前半から数多くのミニサッカー大会を開催していた。

特に冬の長い北海道では，屋内でプレー可能なサッカーとして，練習のみならず競技スポーツとしてのミニサッカーが切望されており，1956年に札幌YMCAの海老澤義道が南米からサロンフットボールのボールと競技規則を持ち帰り，サッカー関係者に紹介している。しかし，この競技を取り入れるまでにはなお時間が必要であった。かねてから寒冷地の不利を打破する方策を腐心していた札幌大学の柴田らは，1972年，サロンフットボールの調査のためにブラジルに渡った。翌年，ブラジルから留学生受け入れとともに，競技規則を翻訳し，「サロンフットボール」という名称で開始した。

1975年，柴田らは，「サロンフットボール普及会」を発足させ，翌年7月には「サロンフットボール協会」を設立した。

(2) 日本ミニサッカー連盟の設立

1977年11月㈶日本サッカー協会傘下の組織として，「日本ミニサッカー連盟」が設立された。初代会長は竹腰重丸，同理事長は森健児が就任し，日本でもミニサッカーの普及・発展のための活動が全国的に行われるようになった。そして，1979年，同連盟は「第1回全国小学生総合ミニサッカー大会」を三菱養和会スポーツクラブで開催した。これは，サロンフットボール，8人制サッカー，そして屋外での6人制ガーデンフットボールの3種目を行う小学6年生以下の大会で，以降1988年まで毎年，全国持ち回りで開催された。

「全国小学生総合ミニサッカー大会」は，その後，㈶日本サッカー協会主催の「全日本少年フットサル大会」に発展する。さらに㈶日本サッカー協会は，全日本少年フットサル大会に加えて，もっともフットサルに熱中する中学生年代への普及などを目的に，1995年から「全日本ジュニアユースフットサル大会」を主催している。

一般のクラスでは，日本ミニサッカー連盟が，1984年から全国の選抜チームを対象に「全国ミニサッカー大会」を主催している。

(3) フットサル委員会とフットサル連盟

これらに加え，㈶日本サッカー協会が，1995年のプレ大会を経て，1996年から単独チームとしてのフットサル日本一を決定する国内最高の選手権大会「全日本フットサル選手権大会」を主催している。1996年の第1回大会では全国から500弱のチームが参加するにとどまったが，回を重ねるごとに参加チームは増えつづけ，2002年の大会からは1000を超えるチームが参加し，日本一を争っている。これらの大会には，普段からサッカーではなくフットサルを中心に競技活動をする選手たちやチームが中心

となって参加するようになってきており，競技レベルの高いフットサルがプレーされている。

一方，女性のための全国的なフットサル大会として，2000年から日本フットサル連盟主催の「ティファール・レディースフットサル大会」が開催されている。また，男女混合や年代の異なった選手たちでチームを組んでフットサルのプレーを楽しむ光景も日常的に見られる。2003年5月，6月には㈶日本サッカー協会が2002年に開催されたFIFAワールドカップ1周年を記念し，「ファミリーフットサルフェスティバル2003」と称して，フットサルを楽しむ大会を開催した。

このように現在では，㈶日本サッカー協会や日本フットサル連盟が主催するチャンピオンシップを争う大会からレクリエーションとして楽しむ大会まで数多くの大会が行われるようになっている。今後も魅力ある大会を開催することが，日本におけるフットサルの普及，強化につながると思われる。

小スペース，少人数でできるフットサルは，サッカーにない手軽さを持ち合わせている。フットサルを含むサッカー文化の限りない広がりと環境の充実を目指す㈶日本サッカー協会は，この目標実現のため，1994年7月「ミニサッカー委員会」を設置した。委員長には，それまで長年にわたり日本ミニサッカー連盟の理事長を務めていた榮隆男が就任し，同年9月に競技の名称変更にともない，「フットサル委員会」と改称した。ここで画期的なことは，サッカーのように年間を通じた個人・チーム登録ではなく，大会ごとのチーム登録という新登録制度を発足させたことである。この登録制度により，「いつでも，どこでも，だれでも手軽にサッカーすることができる」という趣旨を実現することができたわけである。

㈶日本サッカー協会内にフットサル委員会が設置されたことで，その傘下の地域サッカー協会や都道府県サッカー協会内にもフットサル委員会が設置された。一方，それまで日本のミニサッカーの普及発展の活動を行ってきた「日本ミニサッカー連盟」も「日本フットサル連盟」と名称を変更し，フットサル委員会の管理の下，引き続き日本のフットサルの企画実行機関として活動を行うことになった。

2000年4月，日本フットサル連盟はより全国的な組織になるべく改組され，各都道府県にもフットサル連盟の組織化を求めている。現在では，各都道府県のフットサル連盟は17連盟あり，2005年までには12都道府県が設立予定となっている。このように多くの都道府県で連盟が組織されることにより，全国のフットサル愛好者により手軽に，より安全に，なおかつ日常的にフットサルをプレーできる環境が提供できることになる。また，競技スポーツとしても各地でリーグ戦が行われることにより，国内のレベルアップを図ることが可能になり，世界でも通用する高いレベルのフットサルへと発展させることにつながっていくと思われる。

5．フットサルとサッカー

フットサルとサッカーは同じか違うかという議論がしばしば行われる。フットサルは確かに歴史を振り返ればサッカーから派生したものであるが，フットサルとサッカーはそれぞれ独自のルール，文化を持った異なった競技であるといえる。表1には，フットサルとサッカーのルールの違いについてまとめてみた。フットサルとサッカーは似ているようで実はかなりの相違がある。しかしながら，特別な場合以外，手を使わずに相手のゴールに向かってボールを蹴りあい，得点数を競うということを考えると，フットサルはサッカーファミリーの一員であり，フットサルとサッカーは兄弟のようなものであると思われる。

表1

	フットサル	サッカー
広さ（m）	縦40×横20	縦105×横68
ゴールの大きさ（m）	高さ2×幅3	高さ2.44×幅7.32
ボールの大きさ	4号球	5号球
ボールのバウンド	ローバウンド	ノーマルバウンド
試合時間	20分ハーフ（プレーイングタイム）	45分ハーフ（ランニングタイム）
試合人数（人）	フィールドプレーヤー4＋ゴールキーパー1	フィールドプレーヤー10＋ゴールキーパー1
選手交代	交代自由（何度でもプレー可）	人数の制限あり（再プレー不可）
オフサイド	なし	あり
ショルダーチャージ	ファウル	重要なスキル
スライディングタックル	ファウル	重要なスキル
反則の累積	あり	なし

最近では，少年期においてフットサルがサッカーのトレーニングの一つとして用いられることが多くなってきている。2002年FIFAワールドカップで優勝したブラジルでは，フットサルはサッカー選手になるためのワンステップのスポーツとして捉えられている。ブラジル代表のほとんどの選手たちは，少年のころはフットサルをし

て育ったといわれている。その理由として，フットサルはサッカーより小スペース，少人数で行われるため，ボールに触る機会が多く技術向上には最適である。また，ピッチ全体が見渡せるため，指導が一番難しいというゲームの流れを読む力を養うことができる。そのほかにもポジショニングやカバーリングなどサッカーに必要なことを学ぶことができるからである。従って，今後日本においてもフットサルを中心とした育成プログラムが組まれることが，日本のサッカー強化にもつながっていくのではないだろうか。

6．今後のフットサル

長い歴史のある世界の室内サッカー，ミニサッカーをFIFAがまとめあげたのは1988年，そして，FIFAがフットサルという言葉を使い始めたのは1994年。140年になろうとするサッカーに比べれば，フットサルは新しいスポーツであるといえる。2000年の第4回FIFAフットサル世界選手権大会の参加国は，200を超えるFIFA加盟数のうち64カ国のみにとどまるなど，世界中の国々でフットサルがプレーされているわけでもない。しかし，現在FIFAは普及活動を急速に進め，次の世界選手権大会の予選には100を超える国が参加することは確実となっている。また，FIFAは女子，ユースの世界選手権の開催やオリンピック種目にフットサルを加える検討など，フットサルをもっとも人気のある室内スポーツとするべく世界戦略を企てている。これに追従するように，AFCはアジアでフットサルを普及・発展させるための各種プログラムを実行に移している。

まとめ

日本においてもサッカーの普及・発展と相まって，いつでも，どこでも，だれでも楽しめるフットサルは男女関係なく幅広い年齢でプレーされている。手軽に取り組めるスポーツであることから，生涯スポーツ，コミュニティスポーツ，ファミリースポーツとしてさらに楽しまれていくようになることは必然のなりゆきであろう。

しかしながらこのような普及の部分だけでは，日本のフットサルの発展はないと思われる。今後フットサルが独自の文化を持ち，単独の競技として確立していくためにも指導者養成，地域リーグの充実，全国リーグ構想，代表強化などを進めていく必要がある。要するに普及と強化の両輪があってこそスポーツとして発展していくことができる。日本のフットサル界は普及という第1ステージから，強化という第2ステージの展開の時期に来ているのではないだろうか。

参考資料

Javier Lozano Cid（1995）Futbol Sala GYMNOS

クリストファー・ヒルトン（1995）欧州サッカーのすべて　大栄出版

クリストファー・ヒルトン，イアン・コール（1995）南米サッカーのすべて　大栄出版

松崎康弘，須田芳正（2002）フットサル教本　大修館書店

榮隆男（2002）フットサル　魅力あふれる21世紀のスポーツ　大修館書店 pp397- pp403

須田芳正（2002）フットサル攻略マニュアル100　NHK出版

須田芳正（2002）いつでもどこでもフットサル　アイオーエム出版

Ricardo Lucena Ferreira（1997）FUTSAL　EDITORA SPRINT LTDA